

05 歴史学専攻

History

(1) 修士課程

● 目的

歴史学専攻は、日本史学・東洋史学・西洋史学・考古学の各々の分野において、学部の教育を基礎として、専門的な研究能力を身につけることによって、研究・教育およびその他の多方面の分野での職業的能力を有する人材の養成を目的とする。

● 学位授与の方針

修士課程に2年以上在学し、「教育課程の編成・実施方針」に沿った開講科目を30単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受け、修士論文を提出してその審査及び最終試験に合格すること。

日本史学・東洋史学・西洋史学・考古学の各専門分野において、学部の教育を基礎として、広い視野に立った精深な学識を修得し、歴史学専攻の伝統的実証史学である史資料に依拠した専門的な研究能力を身につけることによって、歴史学の成果を社会に還元できること。

大学・研究機関において研究者・教育者・指導者として、また、高等学校をはじめとする教育界や博物館・資料館・文書館・教育委員会などで、専門職として十分に活躍できるだけの人格と専門的研究能力に裏打ちされた力量を兼ね備えていること。

以上のことを満たす人材に修士（歴史学）の学位を授与する。

● 教育課程の編成・実施方針

各コースの履修科目は、特講と演習とが設けられている。特講については、広い領域にわたる学術研究の基礎を培い、社会の基本的要請、たとえば教育機関あるいは研究機関への要請に応え得るよう高度の能力を養う講義を行う。また演習においては、本専攻の伝統的実証史学の追究を指導し、広視野に立った史資料を駆使した論文作成のための研究能力を養う指導を行っている。

教育理念である広い視野に立って精深な学識を受け、専門分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要の高度な能力を養う。そのため、歴史の文献研究だけでなく、アーカイブズ論、記録史料学といった今後の研究動向を見据えた知的情報整理・保存・利用の研究も取り入れた。特に国内や海外の原史料に依拠した研究指導は本専攻の特色である。また、考古学では国内外の発掘調査を行い、それに基づく研究指導も行っている。

さらに、単位互換協定校との単位互換制度も設けている。

● 修了の要件

1. 修士課程に2年以上在学し、30単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受け、修士論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。
2. 各年次の履修単位数は、原則として1年次は指導教員の演習4単位を含む20単位以上30単位未満とし、2年次は指導教員の演習を含む4単位以上とする。

年次	必修科目	選択科目	合計
1年次	指導教員の演習4単位	所属するコースの科目22単位以上または他コースの科目8単位以内を含む22単位以上	30単位以上
2年次	指導教員の演習4単位		

※所属するコースの科目は、指導教員の演習を含め22単位以上履修すること。

※他コースの科目は、2科目（8単位以内）履修することができる。

● 学位論文の審査基準

論文審査にあたっては、下記の項目を審査基準とする。

1. 研究史を踏まえ独自性のある研究となっているか
2. 広い視野と精深な学識があるか
3. 史資料解釈の妥当性があるか
4. 論文の内容と結論までの一貫性があるか
5. 研究成果の公表を行っているか

● 履修上の注意

- 履修科目の選択にあたっては、指導教員の指導を受け、研究テーマに関連の深い全科目にわたって履修すること。
- 指導教員が必要と認めた場合には、指導教員以外の演習科目の中から10単位、他専攻の講義科目の中から4単位に限り履修することができる。その場合は、その科目の担当教員の承諾を得ること。
- 指導教員が必要と認めた場合は、交流協定校「学生交流協定（他大学大学院および大学共同利用機関履修）〈P.12〉」の授業科目を履修することができる。
- 他専攻修得単位・他大学大学院修得単位・協定（認定）校留学により修得した単位は合計10単位を上限として、修了に必要な単位として認定することができる。
- 他系統学部出身者には、当該専攻の基礎学部出身者と同等の基礎学力を充足させるため、大学院の正規授業科目以外に指導教員が必要と認めた場合、学部で開講している関連基礎科目（指導教員の指定する科目）の特別履修を課すことがある。ただし、関連基礎科目の単位は認定しない。

● 開講科目

【日本史学コース】

授業科目	学習方法	単位数	担当者	備考
日本史学特講Ⅰ	講義	4	専任・博（文） 瀧 音 能 之	
日本史学演習Ⅰ	演習	4	専任・博（文） 瀧 音 能 之	
日本史学特講Ⅱ	講義	4	専任 松 本 信 道	
日本史学演習Ⅱ	演習	4	専任 松 本 信 道	
日本史学特講Ⅲ	講義	4	専任・文博 久保田 昌 希	
日本史学演習Ⅲ	演習	4	専任・文博 久保田 昌 希	
日本史学特講Ⅳ	講義	4	専任 林 讓	
日本史学演習Ⅳ	演習	4	専任 林 讓	
日本史学特講Ⅴ	講義	4	専任・博（日） 中 野 達 哉	
日本史学演習Ⅴ	演習	4	専任・博（日） 中 野 達 哉	
日本史学特講Ⅶ	講義	4	専任・博（歴） 小 泉 雅 弘	
日本史学演習Ⅶ	演習	4	専任・博（歴） 小 泉 雅 弘	
日本史学特講Ⅷ	講義	4	専任・博（文） 熊 本 史 雄	
日本史学演習Ⅷ	演習	4	専任・博（文） 熊 本 史 雄	
日本史学特講Ⅸ	講義	4	兼任・博（史学） 三 舟 隆 之	
日本史学特講Ⅹ	講義	4	兼任 大久保 俊 昭	
日本史学特講Ⅺ	講義	4	兼任 太 田 尚 宏	
日本史学特講Ⅻ	講義	4	兼任・博（歴） 小 林 和 幸	
アーカイブズ論	講義	4	兼任 太 田 尚 宏	
記録史料管理論	講義	4	兼任・博（文） 中野目 徹	
記録史料収集整理研究	講義	4	兼任 小 宮 一 夫	
史料情報管理学研究	講義	4	国文学研究資料館	

注）東洋史学・西洋史学・考古学その他コース科目より2科目（8単位）以内を履修することができる。

【東洋史学コース】

授業科目	学習方法	単位数	担当者	備考
東洋史学特講Ⅰ	講義	4	専任 石 井 仁	
東洋史学演習Ⅰ	演習	4	専任 石 井 仁	
東洋史学特講Ⅱ	講義	4	専任・博（文） 中 村 淳	（本年度休講：在外研究）
東洋史学演習Ⅱ	演習	4	専任・博（文） 中 村 淳	（本年度休講：在外研究）
東洋史学特講Ⅲ	講義	4	兼任 金 子 修 一	
東洋史学特講Ⅳ	講義	4	兼任・博（文） 宮 寄 洋 一	
東洋史学特講Ⅴ	講義	4	兼任・博（文） 杉 山 清 彦	
東洋史学特講Ⅵ	講義	4	兼任・博（文） 須 江 隆	

注）日本史学・西洋史学・考古学その他コース科目より2科目（8単位）以内を履修することができる。

【西洋史学コース】

授業科目	学習方法	単位数	担当者		備考
西洋史学特講Ⅰ	講義	4	専任・博(文)	大城道則	
西洋史学演習Ⅰ	演習	4	専任・博(文)	大城道則	
西洋史学特講Ⅱ	講義	4	専任・博(文)	高田良太	
西洋史学演習Ⅱ	演習	4	専任・博(文)	高田良太	
西洋史学特講Ⅲ	講義	4	専任・博(歴)	佐々木真	
西洋史学演習Ⅲ	演習	4	専任・博(歴)	佐々木真	
西洋史学特講Ⅳ	講義	4	兼任・博(文)	井上文則	
西洋史学特講Ⅵ	講義	4	兼任	藪本将典	

注) 日本史学・東洋史学・考古学の他コース科目より2科目(8単位)以内を履修することができる。

【考古学コース】

授業科目	学習方法	単位数	担当者		備考
考古学特講Ⅰ	講義	4	専任・博(文)	寺前直人	
考古学演習Ⅰ	演習	4	専任・博(文)	寺前直人	
考古学特講Ⅱ	講義	4	専任・博(日)	酒井清治	
考古学演習Ⅱ	演習	4	専任・博(日)	酒井清治	
考古学特講Ⅲ	講義	4	専任・博(文)	角道亮介	
考古学演習Ⅲ	演習	4	専任・博(文)	角道亮介	
考古学特講Ⅳ	講義	4	兼任・博(文)	土生田純之	
考古学特講Ⅴ	講義	4	兼任・文博	高久健二	
考古学特講Ⅵ	講義	4	兼任・博(文)	設楽博己	
考古学特講Ⅶ	講義	4	兼任・博(文)	松木武彦	

注) 日本史学・東洋史学・西洋史学の他コース科目より2科目(8単位)以内を履修することができる。

● 授業科目の概要

■ 日本史学特講Ⅰ【講義】

瀧音能之

この科目は、日本古代史研究のうち、文化史の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。

■ 日本史学演習Ⅰ【演習】

瀧音能之

この演習は、日本古代史研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、文化史の領域を主な対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、史料を設定し履修者による発表を通して、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、的確に史料を読解することを基底におくものとする。そのうえで、日本古代史の文化史にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。

■ 日本史学特講Ⅱ【講義】

松本 信道

この科目は、日本古代史研究のうち、宗教の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。

■ 日本史学演習Ⅱ【演習】

松本 信道

この演習は、日本古代史研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、宗教の領域を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、日本古代史研究の宗教の領域にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。

■ 日本史学特講Ⅲ【講義】

久保田 昌希

この科目は、日本中世史研究のうち、戦国時代を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 日本史学演習Ⅲ【演習】

久保田 昌希

この演習は、日本中世史研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、戦国時代を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、日本中世史の戦国時代にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 日本史学特講Ⅳ【講義】

林 譲

この科目は、日本中世史研究のうち、鎌倉・南北朝・室町時代を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 日本史学演習Ⅳ【演習】

林 譲

この科目は、日本中世史研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、鎌倉・南北朝・室町時代を主たる対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実の研究は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、日本中世史の鎌倉・南北朝・室町時代にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 日本史学特講Ⅴ【講義】

中野 達哉

この科目は、日本近世史研究のうち、地域史研究や社会史・政治史・社会経済史などの領域を対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目では、現地での史料調査を実施する。

■ 日本史学演習Ⅴ【演習】

中野 達哉

この演習は、日本近世史研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、地域史・政治史・社会経済史といった領域を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、日本近世史の地域・政治・社会・経済にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目では、現地での史料調査を実施する。

■ 日本史学特講Ⅶ【講義】

小泉 雅弘

この科目は、日本近代史研究のうち、幕末から明治期の政治史・地域史・文化史・宗教史を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。

具体的には、研究史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。

なお、この科目は、必要に応じて現地調査を実施する。

■ 日本史学演習Ⅶ【演習】

小泉 雅弘

この演習は、日本近代史研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、幕末から明治期の政治史・地域史・文化史・宗教史を主たる対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。

具体的には、履修者による研究発表と、それへの履修者相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、特に留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実の検証は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。

そのうえで、日本近代史（特に明治維新史）に関する全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。

なお、この科目は、必要に応じて現地調査を実施する。

■ 日本史学特講Ⅷ【講義】

熊本 史雄

この科目は、日本近代史研究のうち、日本外交史、日本政治史の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、研究史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 日本史学演習Ⅷ【演習】

熊本 史雄

この演習は、日本近代史研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、日本外交史、日本政治史の領域を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、日本外交史、日本政治史にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 日本史学特講Ⅸ【講義】

三舟 隆之

この科目は、日本古代史研究のうち、宗教史の領域を主たる対象として、現在における研究動向と、基礎となる史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目標とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。

■ 日本史学特講Ⅹ【講義】

大久保 俊昭

この科目は、日本中世史研究のうち、政治史・社会経済史を主たる対象として、現在における研究動向と、基礎となる史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目標とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。

■ 日本史学特講Ⅺ【講義】

太田 尚宏

この科目は、日本近世史研究のうち、地方史研究の方法を主たる対象として、現在における研究動向と、基礎となる史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目標とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。

■ 日本史学特講Ⅻ【講義】

小林 和幸

この科目は、日本近代史研究のうち、政治思想史の領域を主たる対象として、現在における研究動向と、基礎となる史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目標とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。

■ アーカイブズ論【講義】

太田 尚宏

この科目は、組織・団体・個人などが行ってきた活動記録としてのアーカイブズを対象に、その生成（作成・授受）過程を理解するとともに、管理（保存）と公開（活用）を促進するための理論と方法について学ぶことを目的とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、アーカイブズ論を参考にしながら史料に対する理解と見識を深め、歴史研究を行うための根拠となり得る史料論を、自分の研究テーマに即して各自が構築することである。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて現地調査やアーカイブズ機関への見学などを含む場合がある。

■ 記録史料管理論【講義】

中野目 徹

この科目は、近代日本の歴史公文書等を対象に、その生成（作成・授受）過程を理解するとともに、記録史料の管理（archival administration）の歴史と理論と方法について学ぶことを目的とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、記録史料管理論を参考にしながら史料に対する理解と見識を深め、歴史研究を行うための根拠となり得る史料論を、自分の研究テーマに即して各自が構築することである。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて現地調査やアーカイブズ機関への見学などを含む場合がある。

■ 記録史料収集整理研究【講義】

小宮 一夫

この科目は、近代日本の私文書（個人文書）を対象に、原秩序の保存、史料整理（目録作成など）、史料活用（読解）といった、史料の利用に関する一連の過程を学ぶことを目的とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、私文書（個人文書）を利用しながら史料に対する理解と見識を深め、歴史研究を行うための根拠となり得る史料論を、自分の研究テーマに即して各自が構築することである。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて現地調査やアーカイブズ機関への見学などを含む場合がある。

■ 史料情報管理学研究【講義】

国文学研究資料館

この科目は、年々多様化・広範化していく「史資料」を対象に、その構造分析、保存（保全）、利用（活用）などをテーマに、それらをアーカイブズ学（記録史料管理学）全体に位置づけて理解することを目的とする。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、アーカイブズ学に対する理解と見識を深め、歴史研究を行うための根拠となり得る史料論を、自分の研究テーマに即して各自が構築することである。具体的には、国文学研究資料館（立川市）にて開催される、史料管理学研修会の長期研修課程（アーカイブズ・カレッジ）を履修する。同研修では、アーカイブズ学を構成する各分野の先端的研究を行っている講師による講義（論文指導）を受けながら、アーカイブズ学の全体像と各論を総合的に理解できるよう目指す。なお、この科目には、国立公文書館をはじめとする文書館での実習が含まれる。

■ 東洋史学特講Ⅰ【講義】

石井 仁

この科目は、東洋史学研究のうち、中国古代中世史を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基本史料を示し、履修者にその内容を習得させることをめざす。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。

■ 東洋史学演習Ⅰ【演習】

石井 仁

この演習は、東洋史学研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、中国古代中世史を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、東洋史学の中国古代中世史にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。

■ 東洋史学特講Ⅲ【講義】

金子 修一

この科目は、東洋史学研究のうち、中国古代史もしくは東アジア史を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基本史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 東洋史学特講Ⅳ【講義】

宮崎 洋一

この科目は、東洋史学研究のうち、中国近世史を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基本史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 東洋史学特講Ⅴ【講義】

杉山 清彦

この科目は、東洋史学研究のうち、中国近代史もしくは内陸アジア史を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基本史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 東洋史学特講Ⅵ【講義】

須江 隆

この科目は、東洋史学研究のうち、中国中世史を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基本史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学特講Ⅰ【講義】

大城 道則

この科目は、西洋史学研究のうち、古代エジプト史の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて現地調査や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学演習Ⅰ【演習】

大城 道則

この演習は、西洋史学研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、古代エジプト史の領域を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得を目指す。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、西洋史学分野の古代エジプト史に関する全体像の新たな提言を目指しつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査・学会参加・研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学特講Ⅱ【講義】

高田 良太

この科目は、西洋史学研究のうち、イタリアやビザンツを中心とした中世史の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を修得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学演習Ⅱ【演習】

高田 良太

この演習は、西洋史学研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、イタリアやビザンツを中心とした中世史の領域を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得を目指す。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、西洋史学分野の中世史に関する全体像の新たな提言を目指しつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には必要に応じて現地調査・学会参加・研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学特講Ⅲ【講義】

佐々木 真

この科目は、西洋史学研究のうち、フランスを中心とした近世および近代史の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学演習Ⅲ【演習】

佐々木 真

この演習は、西洋史学研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、フランスを中心とした近世および近代史の領域を対象として、各々が設定したテーマについて、史料読解力を基礎におき実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得を目指す。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、西洋史学分野の近世および近代史に関する全体像の新たな提言を目指しつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査・学会参加・研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学特講Ⅳ【講義】

井上 文則

この科目は、西洋史学研究のうち、古代ローマ史の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 西洋史学特講Ⅵ【講義】

藪本 将典

この科目は、西洋史学研究のうち、中世史の領域を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる一次史料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、史料の操作・解釈においても同様の要求となる。なお、この科目は、必要に応じて文献の輪読や演習形式の個人研究発表などを含む場合がある。

■ 考古学特講Ⅰ【講義】

寺前 直人

この科目は、日本考古学研究のうち、縄文時代から弥生時代における儀礼の継続と変質を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる出土資料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、出土資料の取扱い・解釈においても同様の要求となる。

■ 考古学演習Ⅰ【演習】

寺前 直人

この演習は、日本考古学研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、縄文時代から弥生時代を主な対象として、各々が設定したテーマについて、実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、日本考古学の縄文時代から弥生時代にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 考古学特講Ⅱ【講義】

酒井 清治

この科目は、日本考古学研究のうち、古墳時代におけるモノの生産や流通に関する諸問題を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる出土資料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる。最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、出土資料の取扱い・解釈においても同様の要求となる。

■ 考古学演習Ⅱ【演習】

酒井 清治

この演習は、日本考古学研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、古墳時代を主な対象として、各々が設定したテーマについて、実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、日本考古学の古墳時代にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 考古学特講Ⅲ【講義】

角道 亮介

この科目は、外国考古学研究のうち、中国の青銅器文化を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる出土資料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、出土資料の取扱い・解釈においても同様の要求となる。

■ 考古学演習Ⅲ【演習】

角道 亮介

この科目は、外国考古学研究に必要な能力の錬磨をはかる。なかでも、中国の青銅器文化を主たる対象として、各々が設定したテーマについて、実証的かつ論理的に組み立てる能力の修得をめざす。具体的には、履修者による研究発表を対象として、それへの相互の批判的な検討をとおし、各自の研究能力を向上させていく。そのおり、以下の諸点については、とくに留意していく。まず、課題の設定は当該分野の先行研究への認識を基底におくものとする。ついで、個々の歴史事実は正確かつ緻密な実証に拠るものとする。そのうえで、中国の青銅器文化にかんする全体像の新たな提言をめざしつつ、あわせて当該するテーマの特徴を鋭く把握するように心がける。なお、この科目には、必要に応じて現地調査などを含む場合がある。

■ 考古学特講Ⅳ【講義】

土生田 純之

この科目は、日本考古学研究のうち、古墳時代を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる出土資料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、出土資料の取扱い・解釈においても同様の要求となる。

■ 考古学特講Ⅴ【講義】

高久 健二

この科目は、外国考古学研究のうち、東アジアの古墳文化を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる出土資料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、出土資料の取扱い・解釈においても同様の要求となる。

■ 考古学特講Ⅵ【講義】

設楽 博己

この科目は、日本考古学研究のうち、縄文時代文化を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる出土資料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、出土資料の取扱い・解釈においても同様の要求となる。

■ 考古学特講Ⅶ【講義】

松木 武彦

この科目は、日本考古学研究のうち、弥生時代社会を主たる対象として、現在にいたる研究動向と、基礎となる出土資料を示し、履修者にその内容を習得させることを目指す。ここにおいて履修者に求める学修の到達度は、修士論文作成の前提となる、最新の研究動向を踏まえて、研究者の入り口に立つことができる水準とする。具体的には、学史の動向を踏まえて研究の現状を理解させ、さらに今後への展望を提案することを求める。また、出土資料の取扱い・解釈においても同様の要求となる。

第一章

第一章

仏教

国文

英文文

地理

歴史

社会

心理

経済

商

公法

私法

経営

診療放射線

リハビリテーション

第四章

(2) 博士後期課程

● 目 的

歴史学専攻は、修士課程における研究成果を基礎として、日本史学・東洋史学・西洋史学・考古学の各々の分野におけるより高度で専門的な研究能力を身につけ、国内外において歴史学研究の先端を担い高等教育機関等で十分に教育・研究の職務を果たしうる人材の養成を目的とする。

● 学位授与の方針

博士後期課程に3年以上在学し、「教育課程の編成・実施方針」に沿った開講科目を12単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、完成度が高く独創的で、学界の水準に達した博士論文を提出して、その審査及び最終試験に合格すること。

日本史学・東洋史学・西洋史学・考古学の各専門分野において、修士課程の研究成果を基礎として、広い視野に立った精深な学識を修得し、より高度で専門的な研究能力を身につけていること。また、研究者として自立でき、国内外において歴史学研究の先端を担い高等教育機関等で十分に教育・研究を果たしうる人材であること。

以上のことを満たす人材に博士（歴史学）の学位を授与する。

● 教育課程の編成・実施方針

修士課程における研究成果を基礎として、各コースで各々の分野における専門的な研究能力を身につけ、国内外において歴史学研究の先端を担い、高等教育機関等で十分に教育・研究の職務を果たしうる人材の養成を目的として、研究指導科目と講義科目を設けている。

指導教員の個別指導のもとで自らの研究計画を作り、博士論文執筆の構想を練っていく。研究発表や学術誌への投稿を行いながら研鑽を積み、高度で独創的な論文になることを目指す。

● 修了の要件

1. 博士後期課程に3年以上在学し、かつ、所定の科目（指導教員の講義）について12単位以上修得し、必要な研究指導を受けたうえ、博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。
2. 指導教員の講義と研究指導は、毎年履修すること。

年 次	必修科目	選択科目	合 計
1年次	指導教員の講義 4単位および研究指導	修得単位は任意	12単位以上
2年次	指導教員の講義 4単位および研究指導		
3年次	指導教員の講義 4単位および研究指導		

● 学位論文の審査基準

論文審査にあたっては、下記の項目を審査基準とする。

修士課程の学位論文審査基準を満たし、さらに完成度が高く独創的で、学界の研究水準に達した論文。

● 履修上の注意

指導教員が必要と認めた場合は、選択科目として指導教員以外の講義を履修することができる。その場合は、その科目の担当教員の承諾を得ること。

● 開講科目

授業科目	学習方法	単位数	担当者	備 考
日本史学特殊研究Ⅰ 日本史学研究指導Ⅰ	講義 研究指導	4	専任・博（文） 瀧 音 能 之	
日本史学特殊研究Ⅱ	講義	4	専任・文博 久保田 昌 希	
日本史学特殊研究Ⅲ 日本史学研究指導Ⅲ	講義 研究指導	4	専任 林 讓	
日本史学特殊研究Ⅳ 日本史学研究指導Ⅳ	講義 研究指導	4	専任・博（日） 中 野 達 哉	
日本史学特殊研究Ⅵ 日本史学研究指導Ⅵ	講義 研究指導	4	専任・博（歴） 小 泉 雅 弘	
日本史学特殊研究Ⅶ 日本史学研究指導Ⅶ	講義 研究指導	4	専任・博（文） 熊 本 史 雄	

東洋史学特殊研究Ⅰ 東洋史学研究指導Ⅰ	講義 研究指導	4	専任	石井 仁	
東洋史学特殊研究Ⅱ 東洋史学研究指導Ⅱ	講義 研究指導	4	専任・博(文)	中村 淳	(本年度休講：在外研究)
西洋史学特殊研究Ⅰ 西洋史学研究指導Ⅰ	講義 研究指導	4	専任・博(文)	大城 道則	
西洋史学特殊研究Ⅱ 西洋史学研究指導Ⅱ	講義 研究指導	4	専任・博(歴)	佐々木 真	
考古学特殊研究Ⅰ 考古学研究指導Ⅰ	講義 研究指導	4	専任・博士(文)	寺前 直人	
考古学特殊研究Ⅱ 考古学研究指導Ⅱ	講義 研究指導	4	専任・博(日)	酒井 清治	

● 授業科目の概要

■ 日本史学特殊研究Ⅰ【講義】 ■ 日本史学研究指導Ⅰ【研究指導】

瀧音 能之

日本古代史研究のうち特に文化史の領域を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文(課程博士)の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をするをを求める。

■ 日本史学特殊研究Ⅱ【講義】

久保田 昌希

日本中世史研究のうち戦国時代を主たる対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文(課程博士)の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をするをを求める。

■ 日本史学特殊研究Ⅲ【講義】 ■ 日本史学研究指導Ⅲ【研究指導】

林 譲

日本中世史研究のうち鎌倉・南北朝・室町時代を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文(課程博士)の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をするをを求める。

■ 日本史学特殊研究Ⅳ【講義】 ■ 日本史学研究指導Ⅳ【研究指導】

中野 達哉

日本近世史研究のうち地域史・政治史・社会経済史といった領域を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文(課程博士)の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などにも赴き、積極的に活動をするをを求める。

■ 日本史学特殊研究Ⅵ【講義】
■ 日本史学研究指導Ⅵ【研究指導】

小泉 雅弘

日本近代史研究のうち幕末から明治期の政治史・地域史・文化史・宗教史を対象とする科目である。履修者に対しては、この研究テーマにそった学位請求論文（課程博士）の作成を念頭においた指導・助言になる。

履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである。

なお、必要に応じて現地調査を実施し、履修者には、学内のみならず学会などに赴き、積極的に活動することを求める。

■ 日本史学特殊研究Ⅶ【講義】
■ 日本史学研究指導Ⅶ【研究指導】

熊本 史雄

日本近代史研究のうち日本外交史、日本政治史の領域を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文（課程博士）の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をするをを求める。

■ 東洋史学特殊研究Ⅰ【講義】
■ 東洋史学研究指導Ⅰ【研究指導】

石井 仁

東洋史学研究のうち中国古代中世史を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文（課程博士）の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をするをを求める。

■ 西洋史学特殊研究Ⅰ【講義】
■ 西洋史学研究指導Ⅰ【研究指導】

大城 道則

西洋史学研究のうち古代エジプト史の領域を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文（課程博士）の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をするをを求める。

■ 西洋史学特殊研究Ⅱ【講義】
■ 西洋史学研究指導Ⅱ【研究指導】

佐々木 真

西洋史学研究のうちフランスを中心とした近世および近代史の領域を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文（課程博士）の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識および諸技能の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をするをを求める。

■ 考古学特殊研究Ⅰ【講義】
■ 考古学研究指導Ⅰ【研究指導】

寺前 直人

日本考古学研究のうち縄文時代から弥生時代を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文（課程博士）の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をすることを求める。

■ 考古学特殊研究Ⅱ【講義】
■ 考古学研究指導Ⅱ【研究指導】

酒井 清治

日本考古学研究の領域を対象とする科目である。履修者にたいしては、この研究テーマにそった学位請求論文（課程博士）の作成を念頭においた指導・助言になる。履修者は、専門研究者として独り立ちできる学識の修得を目指す存在と位置づける。履修者が課程修了後に目指すところは、高等教育機関、資料保存利用のための諸機関における専門職として社会的責任を果たすことである、と認識する。履修者には、学内のみならず学会などに赴き、一定の活動をすることを求める。

第一章

第一章

仏教

国文

英米文

地理

歴史

社会

心理

経済

商

公法

私法

経営

診療放射線

リハビリ

第四章